

星槎大学機関リポジトリ

| | |
|-----------|---|
| 論文種別 | 資料 |
| タイトル | 社会人大学院生が採用する研究方法とは —ウォレス『教師がまとめる研究論文』を中心に— |
| Title | * |
| 著者 | 三輪 建二 |
| Author(s) | * |
| 誌名 | 星槎大学大学院紀要 |
| Citation | <i>Seisa University Research Studies in Education</i> |
| 巻 | Vol. 2 |
| 号 | No. 1 |
| ページ | pp. 94-100 |
| 発行日 | Dec-14-2020- |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1486/00000196/ |

資料

社会人大学院生が採用する研究方法とは

—ウォレス『教師がまとめる研究論文』を中心に—

三輪 建二

(星槎大学大学院教育学研究科)

1. はじめに

星槎大学大学院は修士レベルでは、教育実践研究科専門職学位課程と教育学研究科修士課程が、2020年度からは博士課程として教育学研究科博士後期課程が開設されている。いずれの課程の大学院生も、多くは現職の社会人（以後、社会人大学院生とする）であり、対人関係にかかわる仕事をしながら通信・通学の手段で学んでいる。

社会人大学院生は、学位論文を執筆するにあたり、所属する職場に由来する研究関心に基づいて研究テーマを設定することはできるとしても、その研究テーマの解明にふさわしい研究方法の選択および研究方法修得に苦勞していることが多い。たとえば、社会人大学院生は、学術論文を書くための「基本スキルが不足している」という指摘がある（近田2008）。また、教育・医療・福祉分野に勤務する対人関係専門職の社会人大学院生の場合には、複雑な人間関係を解明するという点では、アンケート調査などの量的研究よりは、インタビュー調査をはじめとする質的研究への関心が高い。しかしそのために、質的研究の遂行のさいに、「データ分析過程において様々な困難に直面」することがあるという指摘もある（中山ほか2015, p. 39）。

ここでは2020年に出版されたスーザン・ウォレス著、三輪建二訳『教師がまとめる研究論文：量的研究・質的研究・アクションリサーチ』（鳳書房）をもとに、社会人大学院生が提起する以下の関心について、著者の基本的な考え方を紹介し、検討するものである。

社会人大学院生にとって：

- ・ 研究テーマの選定および研究方法の採用はどのようなものが望ましいか
- ・ 研究方法にはどのような種類のものがふさわしいと言えるのか
- ・ 量的研究が持つ長所と課題は何か

2020年10月14日受理

¹ 星槎大学大学院教育学研究科・教授

・質的研究が持つ長所と課題は何か

著者のスーザン・ウォレスは、英国の継続教育研究者である。日本の専門学校などにあたる職業継続教育カレッジでの勤務経験があり、その後ノッティンガム大学で修士号、シェフィールド大学で博士号を取得している。地方教育当局での勤務を経てから、ノッティンガム・トレント大学の教授に就任している。大学では、職業継続教育カレッジなどで教鞭をとる現職教員に対する修士課程での指導や、この部門の教員の能力開発プログラムにかかわっている。またN & K・アップルヤードの長年の友人であり、アップルヤード『教師の能力開発：省察とアクションリサーチ』（鳳書房、2018）のシリーズ編集者でもある。

2. 実践研究と研究方法

社会人大学院生が研究する理由（第1章）について、ウォレスは次のように述べる。

研究とは実践についての省察プロセスを示すものであり、専門職という役割の中核に位置づく活動であるという答えである。もうひとつは、研究は教育活動や学習活動の質を高め、維持するための重要なツールであるという答えである。研究は、教師が授業で直面するさまざまな困難やディレンマに対して、その解決策をさぐるツールになりうる（p.3）。

社会人大学院生にかぎらず、一般に修士課程・専門職学位課程や博士課程での論文指導では、当該分野の先行研究を渉猟し、そこから、研究分野に不足するものを見つけ出し、リサーチクエスチョンとして設定することが奨励される。しかしここでは、対人関係の専門職としての自らの実践という個別具体的なことから出発し、教育活動や学習活動の質を向上させるのをめざすことが、研究にほかならないと宣言している。先行研究から入るよりは、みずからの実践に注目し、そこから問いを立てるという指摘になっているのである。

研究テーマと研究方法との関係については、あくまでも、上記の実践研究の目的にふさわしい個別具体性のある研究テーマを選択すること、そして、それに対応する研究方法を採用するという順番になっている。したがって、最初に研究方法の修得から入らなくてもよいとした上で、次のように指摘する。

教育活動や学習活動では、複雑な人間行動や人間関係のやりとり、価値観に焦点があてられるため、教育研究のアプローチは質的研究になることが多い。たとえば、〈生徒たちが学習活動から逸脱していく理由を知りたい〉と考えるならば、質的アプローチはその目的をかなえるのに適切であり、役立つものになる。他方で、〈学習活動から逸

脱していく生徒たちのうち何割が、英語や数学の成績がCレベル以上であるかを知りたい)と思うならば、数値とその相関関係を調べる「量的研究」がふさわしい(p.11)。

3. 研究方法としてのアクションリサーチ・ケーススタディ・文献研究

量的研究・質的研究の説明に入る前に、ウォレスは、一般的な研究方法として、アクションリサーチとケーススタディ、および政策文書などの文献研究の3つをとりあげている。まず、アクションリサーチ(第4章)は、教師が、みずからの教育実践についておこなう研究であると述べている。またアクションリサーチは、省察や参与観察を組み入れていることから、サイクルやらせん形の展開になると指摘する。

[アクションリサーチの]研究プロセスは、サイクルやらせん形として表現されることが多い(中略)。最初の介入参画に満足がいけない場合には、私たちはそのプロセスを再度回していこうとするため、研究プロセスのサイクルは次第にらせん形になっている(中略)。らせん形になることで、理解がいつそう深まるのである(p.50-51)。

自分の教育実践をみずから研究するアクションリサーチが、したがって、実践者が同時にみずからの実践に関する研究者になることが、はたして客観性を標榜する学術的な研究論文にふさわしいかについては、議論がある。研究方法として用いる点については、社会人大学院生も不安に陥ることにもなりかねない。ウォレス著者は、課題・仮説・検証といった「直線的な実践者研究」ではなく参与観察→課題の特定→課題の解決→参与観察というサイクルや、そのサイクルのくり返しであるらせん形の実践研究となることで、アクションリサーチは研究になりうると指摘する。また実践の前後に「省察的なジャーナル」をつけ、記録をもとに省察をくり返すことで、研究に値するものになるとも述べている。

ケーススタディ(事例研究、第5章)は、翻訳者の関心である「成人教育学」「成人学習論」「省察的实践論」に重なる論点であると言ってよい。社会人大学院生の研究は、ある理論を実践にあてはめる研究ではなく、複雑多様な実践のなかから問い(リサーチクエスション)を立て、省察的に解明する研究が中心になることから、複雑多様な事例をめぐる省察的な検討は、社会人大学院生の研究に必要であると指摘する。

ケーススタディは、教育研究では幅広く用いられる研究方法である。それは、実生活に内在する本質的な問いを探究する方法を提供してくれる。教育研究は一般に、教室内の規模の小さい研究になることが多いため、ケーススタディは、自分の能力開発プログラムを進めるのにふさわしい研究でもある(p.69)。

大学院であるから理論的な研究や文献検討の授業をするというのではなく、事例をめぐってさまざまな角度から検討を重ね、「実生活に内在する本質的な問いを探究する」ことは、社会人大学院生にとって必要な学修ということになる。

文献研究や先行研究という章ではなく、先行研究のなかでも、「政策文書」の探究(第8章)を取りあげているのは興味深い。政策文書とは、先行研究の一つとして、教育政策や教育機関の政策や方針の文書、および学術論文を研究することを意味している。社会人大学院生は一般に、学術的な先行研究や文献研究の探索には慣れていない。多忙な社会人大学院生にとって、現場に出かける調査ではない文献研究、「コンピュータによる研究」は時間の節約になり、また、文献を幅広く探索できる点で長所がある。その上で著者は、政策文書の探究において、気をつけなければならない課題についても指摘する。

特に、政策文書を先行研究や文献研究する場合には、書かれてある内容をうのみにせず、そのなかにひそむ「イデオロギー」や「教育言説」に敏感になること、シンプルで感情に訴えるような「レトリック」の誘惑に負けず、文書を冷静に批判的に考察する必要性を説明する。イデオロギーを説明する一文には、温厚ともいえる著者の、静かな怒りがにじみ出ている。

イギリスの教育・訓練に最大の影響力を持ったイデオロギーは、「市場原理」であり、市場原理を教育部門に導入すれば、教育活動と学習活動の質が向上するという信念である。それは、継続教育カレッジ間の競争や、学校間の競争での規範のひとつとなり、代案があるということすら忘れるくらいになっている(中略)。市場原理イデオロギーは完璧に機能し、維持しうる唯一のものとなり、価値観や信念のセットとなって私たちにおそいかかっている(p.130)。

批判的な文献研究という主張は、翻訳者も論文指導で特に意識している論点である。たとえば教育関係者は、中央教育審議会答申、学習指導要領、アクティブラーニング、主体的・対話的で深い学び、あるいは県や市町村の教育委員会の方針などをそのまま当然視する傾向がみられる。現場感覚としては当たり前かもしれない。しかし、それだからこそあえて、文書を多様な角度で省察、検討する必要がある(三輪 2019)。

4. 量的調査と質的調査：アンケート・インタビュー・参与観察など

本書の中間部では、オーソドックスな研究方法であるアンケート調査、インタビュー調査、参与観察が取りあげられている。私たちは、これらの調査研究の基本について、具体的に学ぶことができるし、それらを重複して用いることで、データの信頼性を確保すると

いう点で、三角測量的方法について学ぶこともできる。

まず、アンケート調査(第6章)については、本書では未完成ともいえる調査票作成事例をケーススタディとして取り上げる。またそこから、「回答を誘導する質問」などの誤りを避ける必要性を提示している。また調査結果をまとめやすいリッカート測定を採用や、「閉じられた質問」と「開かれた質問」を組み合わせるという提案も行われている。

アンケート調査だけでは、被調査者の匿名性や守秘義務が守られにくいという観点から、被調査者をグループにするフォーカスグループ・インタビューも論じられる。

次に、社会人大学院生が研究方法として選ぶことの多いのは質的研究である。まず、代表的な質的研究方法であるインタビュー調査(第7章)の長所について、実践研究にとって持つ、複雑な人間関係の解明に役立つという点に加えて、適度に、「インタビュー・スケジュールからの逸脱」(p.114)があるほうが、自由な回答が得られ、データが豊かになるという考え方を示している。インタビュー調査の短所に関しては、「インタビューで語られることは、何らかの形で記録され、転記され、分析されるが、それは時間のかかる」(p.105)ことがあるとする。また質問をめぐる課題(回答を誘導する質問、過度に複雑な質問など)があることも指摘しており、とくに回答を誘導する質問に関連して、思いの強さのあまりに、インタビュー対象者を不愉快にさせてしまう失敗事例を検討している。

参与観察(第7章、単に観察とも呼ばれる)については、その場で即座に判断ができることや、インタビュー調査と合わせることで、インタビューでの回答者の様子を直接見ることができるという長所を指摘する。その上で、「研究者の先入観から自由になるわけではない」(p.106)ことや、データの信頼性を確保しきれないことを指摘している。

5. おわりに

1. で述べた問いについて、本書からは以下の答えを導くことができるだろう。

はじめに、研究テーマの選定と研究方法の採用との関係については、著者は、社会人大学院生は研究方法の理解に関心があるとはいえ、出発点は現実の実践からの問いであり、実践から生まれた関心をリサーチクエスションへと高めることであり、その上で、それにふさわしい研究方法を採用するという順番で良いとする。

次に、社会人大学院生は、実践上の課題から研究テーマを設定することが多く、それにふさわしい研究方法は、まずは質的研究(インタビュー調査、参与観察、グラウンデッドセオリーなど)であり、また数値の確認という点では量的調査(アンケート調査とフォーカスグループ・インタビュー)が採用されるとする。また、両者にまたぐ研究方法として、アクションリサーチ、ケーススタディ、文献研究があるという。

量的研究に関しては、データの信頼性を高めるために、三角測量的方法を用いること、

誘導的な質問をしないためにも、閉じられた問いと開かれた問いをバランスよく配置することなどを指摘する。質的研究に関しては、複雑な人間関係の解明に役立つという長所はあるとした上で、やはり回答を誘導する質問を避けること、インタビュー・スケジュールを柔軟にし、問いを半構造化する必要性などを指摘している。

量的研究と質的研究の両方にまたがるものとして、アクションリサーチや事例研究を取りあげており、現職の社会人大学院生だからこそ、自分の実践を検討することが研究となりうる点を強調している。さらに、政策文書を含む先行研究では、文書の文言をうのみにせず、文書が持つイデオロギー性を見抜く文献研究と分析が必要である点を指摘している。

なお、最初の問いには出てこないが、翻訳を終わった段階で、次の2点が印象に残ったので、記しておこう。翻訳者の立場からは、本書からは、論文指導・添削という点からも学ぶことができる点を指摘しておきたい。

まず、本書に登場する教員などの社会人大学院生がみな、さまざまな課題を懸命に解決しようとし、そのために実践的な研究論文をまとめようとする基本姿勢を持っていることである。彼らが抱える課題は、不本意就学の学生、学習をいやがる学生、ディスレクシアの学生の指導のあり方など、10以上ものケーススタディで取りあげられている。

社会人大学院生の教員の場合、教育上の課題に直面すると、「今どきの学生は基礎学力が・・・」などと、すべてを学生の責任にすることが少なからず見受けられる。しかしここに登場する教員たちは、学生の学力や意欲の低下、職業教育の社会的評価の低さなど、学生や学校制度を悪者にして終わろうとはせず、課題と思われることに真正面から取り組んでいる。社会人大学院生が実践研究論文をまとめることは、こうしてみると、課題を責任転嫁せずに自らの課題として引き受け、実践の質の向上をめざす探究心と省察の成果であることを、本書は教えてくれるのである。

次は、指導教員の論文指導に対する姿勢である。第7章や第11章では、著者のウォレス自身がチューターやメンターとして、社会人大学院生のレポートや研究計画書を添削する場面が登場する。そこでは、論文を赤でチェックする方法は採用されておらず、ワードのコメント機能により、原文が損なわれない形でアドバイスがおこなわれている。社会人大学院生にとって、赤字まみれの添削は、ありがたい半面で意欲が半減される指導にもなりかねない。またここでのアドバイスには、課題の指摘だけではなく「よい」といったポジティブな記載も散見される。原文を残しながらのアドバイス、よい点を積極的に指摘する指導法は、実際には簡単にできるものではない。

ウォレス氏にこの指導法について尋ねたところ、「成人・社会人の自己決定性（self-directedness）という成人学習論の観点を論文指導に生かしているためである」というコメントが返ってきたのが印象的であった。自分自身のこれからの院生論文指導のさいに、成人学習論を生かした論文添削を参照にしたい。

注記

本原稿はS・ウォレス『教師がまとめる研究論文』(鳳書房、2020)の解説を大幅に書き直したものである。また、本翻訳書は、三輪建二(研究代表者)による科学研究費補助金:平成30(2018)年度基盤研究(C)(一般)「『経験省察型』卒業論文・修士論文指導モデルの開発研究」の研究成果として刊行されている。

参考文献

- N & K・アップルヤード、三輪建二訳(2018). 教師の能力開発:省察とアクションリサーチ. 鳳書房
- S・ウォレス、三輪建二訳(2020). 教師がまとめる研究論文:量的研究・質的研究・アクションリサーチ. 鳳書房
- 近田政博(2008). 社会人大学院生を対象とする研究方法論の授業実践. 名古屋高等教育研究(8), 73-94
- 中山 登志子、舟島なおみ、定廣和香子、横山京子、松田安弘、鈴木美和、野本百合子、山下暢子、山澄直美、亀岡智美(2015). 大学院看護学研究科博士後期課程に在籍する学生の博士論文作成過程の経験. 千葉看護学会会誌 21(1), 33-42
- 三輪建二(研究代表者). (2019). 「経験省察型」卒業論文・修士論文指導モデルの開発研究～インタビュー調査報告書(平成30年度基盤研究(C)(一般)).